

路上生活者の個人史

第6回

竹中尚文

今回、聞き取りに応じてくれたのは福岡治郎氏(仮名)である。福岡氏は自分の話を公にするのはどうかなあ、といいながら聞き取りに応じてくれた。インタビューの最後にこの話はすべて本当じゃないと、いうことで話し終えた。従って、今回の記載も本人を特定できないようにしていることを了解して読んでいただけるとありがたい。

福岡治郎氏(仮名)1948年生まれ。

三重県で生まれて5歳の時に、名古屋市に移って名古屋で育ちました。

父親は自動車部品を作る小さな工場を経営していました。経営といっても、自分が最も働く鉄工所の親父でした。私は長男ですぐ下に弟がいて、その下に二人の妹がいました。

小学校と中学校は地元の公立に通いました。高校は、私立の大学付属のところに行きました。いくつか受験をしたのですが、態度が悪かったので面接で落ちたといわれていました。自分でも、そうだろうな、

仕方がないと思っていました。大学は文化系の教科が苦手だったので、工学部機械工学科に入りました。父親が自動車の特殊な部品を作っていたのが、その選択の一因だったようにも思います。

大学は中退です。21歳の時でした。4年生が始まったばかりの頃でした。学費も払い込んであったので、そのまま行けば卒業という年でした。酒場で仲良くなった女性と大阪に駆け落ちをしました。駆け落ちだなんて自分だけが思っていたのかもしれません。50万円ほど持ってきたのですが、お金はすぐに無くなってし

まいりました。お金が無くなると女性はいなくなりました。

今更、名古屋に帰るのもかっこ悪いと思っていたら、ヤクザの奥さんがやっていた飲み屋で使ってもらえることになりました。あんまりお金にならなかったけど、困らなかったですね。困らない点では、タダで仲良くなってくれる女性が何人もいました。その頃から花街でも働くようになりました。結婚？ まったく考えませんでした。結婚をしようといってくれた女性もいましたよ。しかし、私が一人の女性で落ち着くような人間じゃないですから、無理なことだと分かっていました。

30代になると日雇いの仕事に行くようになりました。関西空港の工事もあり、いいお金になりました。その頃から酒を飲んで仕事に行くのは禁じられるようになりました。関西空港の工事が済んで、神戸の方で大きな工事が続きました。神戸から帰る作業員を運ぶバスの中で飲む酒はうまかった。あれは実にうまい酒でした。

30代から40代にかけて日雇いの仕事もいいお金になったし、ヤクザの兄貴がやっているテキヤの仕事も手伝ったりして、お金には困りませんでした。その頃ですよ、ヤクをするようになったのは。売人は私によくくれるのです。通常、売人はパケといってビニールの小袋に入れているのですが、袋を含めての重さなので、袋の重さが売人の儲けなのです。私によくくれるのは7~8グラムほど入っていました。そんなことだから、私はマークされていたのだと思います。ある日、「福岡さん！」と見知らぬ人から声をかけられました。気がつけば周りを刑事に取り囲まれて、脇に覆面パトカーが停まっていた。その場で逮捕されました。

今は、よく止められたものだと思いますよ。もっともヤクを買うお金なんて全くないからかもしれません。仮に、目の前に「あげるよ」と置かれたら自信はありませんがね。でも、もうやらないと思います。60歳の頃に、私によくしてくれた姐さ

んが亡くなったのです。手を合わせに行ってから、結婚しようといってくれた女性に電話をしたのです。そしたら亡くなっていました。落ち込みました。しばらく立ち直れませんでした。

今は、福祉の人のお世話になって1Kのアパートで暮らしています。ありがたいと思っています。ちょっと贅沢をすると電気代が払えなくなって、電気が止まったりすることもあります。こんな私がいい暮らしをしています。ありがたいことです。

【記録者談】今回の話は、話者を特定しにくくしたものです。彼は路上生活者対象の食糧支援に並んでいた人です。私たちは、路上生活者だけを対象にしているつもりはなく、困っているならば支援を受けてほしいというつもりです。しかし、「路上生活者じゃないのに並んでいる」とか「住む所があるのに並んでいる」

という声があります。こうした声の多くは支援対象者からのものです。ブルーシートで雨露をしのぐ人たちから見れば、住む所がある人は自分たちと同じではないといって支援の列から排除することがあります。更生者への支援によって、福岡氏のように住む所のある人たちもいます。罪を犯したこともなく、人に知られることなく路上生活者となった人にとっては、同じ程度の生活困窮者ではありません。しかし、私たちがしている支援はささやかな支援で、誰の生活も変えることもできません。どの程度の生活困窮者もこの食事支援の列に並んでもいいように思います。

今回の福岡氏のインタビューは、彼自身で自分の話す内容が自分の生活に影響を与えないか心配したのかもしれませんが。一方で、私は彼の人生や生活が表現されると、支援を受ける列に並びにくくなることも心配もしました。このような点からできるだけ福岡氏が特定しにくいように記述しました。